

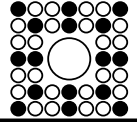
Newsletter of the British Council Japan Association



BCJA Newsletter

No.10

September 30, 1998



46年前の英国留学

大平五郎

英国文化振興会から英国留学生の募集の案内があったのは1951年の暮頃かと思う。英国文化振興会といってもその実体は、英国大使館内の一室の、しかも一つのテーブルでRedman氏(故人)とDorothy Britton嬢(現Lady Dorothy Bouchier、葉山在住)のお二人で事務をとっていただけであった。何十人か何百人(?)かの応募者の中から幸い選ばれて、神戸港をサンゴラという印度行の2000トン位の貨客船で出発したのは52年の7月20日頃だったと思う。当時、日本は講和条約は締結されたものの、まだ発効以前で外国との国交はなく、連合国占領下の日本には外務省、大蔵省、文部省などあっても何の動きも出来ず、一人であるいはブリトン嬢につれられて英国大使館を根拠地として3~4日ばかりで次々と手続きをしていったものであった。但し各省とも、まだどうしたらいいのか決まっていない状態だったのでいろいろ手間どることが多かった。日本に英国文化振興会が設立されたのはこの時が最初かと思うが、我々が第1回の留学生なのか第2回目なのかは判然としていない。というのはその前年すでに3名の留学生が渡英しており(あるいは既に在英していたのかも知れない)そのあたりが少し曖昧なところがあるようである。英国文化振興会は、その後岩波ビルの6~7階に、そして猿楽町に、さらに現在の神楽坂に移ったが、岩波ビルに居た頃当時の代表の考えでブリティッシュ・カウンシルという原名に変えた筈である。

ところで公募された我々留学生仲間は多分8名だったと思うがいずれも制限年齢ぎりぎりか、越していた者が多い。船の都合で1週間香港に滞在したが、大体教会や牧師さん宅に分散して厄介になった。香港ではじめての外国生活をしたのち、P & O社のカーセージという2万トン級の客船でボンベイ、コロンボ、ペナン等々当時の英国領各地に寄港しながら9月1日早朝泥流渦巻くテムズ河に入り、ロンドン港に着いた。そこで、始めて英国貨幣を渡され、汽車でリバプール・ストリート駅に到着した。そこにはブリティッシュ・カウンシルの若い人達と多分アルバイトの学生たちが迎えに出ており万事世話をしてくれ、バスに飛乗りかたまで教えてくれた。

それから1年余り、私はバーミンガム大学で生活することになった。着いた翌日の9月2日、霜が降りたのには驚いた。たずねた宿の主人曰く「We have no climate, only the weather.」なるほどと思った次第である。私達は教授、助教授クラスの人全員で、向うでも学生としての扱いにも困り、senior research worker という中途半端な肩書で研究室に入った。たまたま私の大学に宮島龍興氏(後の筑波大学長)も数物研究室

に居たので日曜など、よく一緒に出かけたものである。朝永振一郎氏などもアメリカからふらりとやってきたりした。当時はペニー、シリング、ポンド、ギニー等貨幣は12進法で、これは私には便利だと思っていたが、研究室での華氏の温度計、長さのインチ、フィート、マイルはまだいいとしても重さのオンス、ポンド、ストーンに至ると慣れるまでにかかなり苦労した。当時は英国も食料は配給制で、砂糖、チョコレート、肉などいずれも切符で買うわけであるが、我々日本人には食べきれない量で、下宿では宿の人達を喜ばせたものであった。配給とはいうものの全く日本で米その他の切符制とは比較にならず老大国の重みがあった。53年の女王の戴冠式を機会に、砂糖などの切符制を廃止したが、これが女王の人気を一段と高めることになった。戴冠式には勿論ロンドンに見物に出かけたが、この日だけはイギリスの町なかでも、昼間から酔払いの通行人がいることを発見した。

私の世話になっていた宿はバーミンガム大学機械工学科講師宅(後に教授、現在は定年後会社顧問)で、その後も交際を続けており、数十回の渡欧の際にも、時間をくり合せて訪ねるようにしている。

今にしてこれまでの46年をふりかえてみると、第一回目の渡欧の折はイギリスはいかにも気品にあふれ、明治、大正の頃の日本にはこのようなよさが多分にあったらうと思われる点を感じられた。ところが何度も行くうちにだんだんイギリスも日本と同じく、行儀も言葉も乱れてきていることを感じないわけにはいかなかった。ただ公共に関する問題、公害などに関していえば昔泥流だったテムズ河はすっかりきれいになり、スモッグなどについては非常に改善されたことは見習わなければなるまい。53年の頃、ロンドンのロヤル・アルバート・ホールでの演奏会で霧のため指揮者が譜面が読めなくなり、演奏者も指揮棒が見えなくなって中止したことがあった。又バーミンガム大学内で私自身正門を入った研究室までたどりつけず、あたりの草原で休んでいたとも経験した。こんな折には道路の主な十字路には警官が鐘をふりならしながら、ここは何町の何番地と連呼していたものであったが、今になると懐かしい思い出である。

日本は現在ひどい変りようをしている。世の流れは同じだろうからイギリスもやはりどんどん変化していることであろう。しかし日本の変りようは突発的で、その変りのもとには思想も哲学もないがイギリスの場合まだお国柄の「Slow & Steady」に基づいているらしく連続性があり、その底には流れが息づいているのはやはり範としなければなるまい。

(OHIRA Goro, Univ. of Birmingham 1952/53 東北大名誉教授)

ヘンリー・ダイアー著『大日本---東洋のイギリス---』訳書発刊に思う

北 政巳

私は1975-76年の留学は、勤務大学から派遣され、グラスゴウ大学の経済史講座のリサーチ・フェローとして、スコットランドの銀行史を研究した。御存じのように現在でも独自の地域銀行券発行に固執するスコットランド銀行制度の成立史、イングランド制度との比較、さらに我が国への影響を調査し拙著『近代スコットランド社会経済史研究』(同文館)に結実した。1年間のグラスゴウ大学での生活の中で、幕末・明治以来の日本へ近代技術をもたらした学者・技師、また外交官、ビジネスマンの中にいかにスコットランド人が多かったかに気づき、またいかに多くの日本人学生がグラスゴウ大学に留学した事実に基づいて、プリティッシュ・カウシル・スカラールとして再び1979-80年、グラスゴウ大学経済史講座で前回と同じく大学構内のチェックランド教授宅の半地下に下宿、同大学の資料室・図書館をはじめ、ケンブリッジ、ロンドン、マンチェスター、リバプール、リーズ、エディンバラ、アバディーン、ダンディ等の諸大学の図書館・資料室に通い、日本とスコットランドの交流史をてがけ、帰国後『国際日本を拓いた人々、日本とスコットランドとの絆』を発刊した。その後、多くの人が日英交流史研究を手がけられ、拙著を参考にして、発表されていることは学者冥利につきるものがある。

その中で最も注目を集めたのが、「我が国の土木工学の父」と讃えられた初代東京大学学長のヘンリー・ダイアーの人物像であろう。興味深いことは、札幌農学校のクラークが僅かの滞在ながら「青年よ大志を抱け」の名句と共に大きく歴史上に存在感を刻みながら、9年間にわたり工部大学校(東京大学の前身)の都検(校長)をつとめたダイアーがほとんど忘れられている。しかし昨年には東京大学でダイアー・シンポジウムが開催される等、彼の歴史的復権が進められている。また本年秋をめざし、実業の日本社が創立100周年企画として、元毎日新聞の平野勇夫氏の手でダイアーの日本に関する名著『大日本』の翻訳が出版進められている。

ヘンリーダイアーは1873年に英国のスコットランドのグラスゴウ大学卒業直後、25歳の若さで来日し、工部大学校を中心に我が国の西欧近代技術習得に大きく貢献し、グラスゴウに帰国後には『大日本』を執筆した。ヘンリー・ダイアーは、1848年グラスゴウ市郊外に生まれたが、当時のグラスゴウは「イギリスが世界の工場」と呼ばれた時代に「西部スコットランドがイギリスの工場」と讃えられ、機械・鉄道・造船業の世界的成功を通じて、ハイ・テク都市として注目を浴びていた。事実、ダイアーの経歴をみても、徒弟修業をしながらアンダーソン・カレッジ(Anderson College、現在のストラスカライド [Strathclyde] 大学)に学び、次いでグラスゴウ大学が蒸気機関の発明者ワット(James Watt)を記念して設置したヴィクトリア女王欽定講座の世界最初の土木工学部に期生として入学、「土木工学の父」と讃えられたランキン(William J.A. Rankine)教授に師事した。ダイアーはグラスゴウ大学在学中、数学・物理学・機械工学、地質学で優秀な成績を収め、アーノット(Arnot)賞、ウォーカー(Walker)賞、ワット(Watt)賞を獲得し、ランキン教授の秘蔵つ子であった。1872年の学業終了にあたり、恩師のランキン教授から日本政府工部省のロンドン代理人をつとめるマセソン(Hugh Matheson)の依頼として東京に設立される近代技術カレッジの都検就任の話を受けた。若きダイアーは、封建主義を脱して開国間もない東洋の小さな島国・日本にグラスゴウ大学を中心に編成された「お雇い教師団」を引き連れて1873年に到来する。しかし日本の方でも、このカレッジ設立には動きがあった。1872年秋にロンドンを訪問した岩倉使節団の副使伊

藤博文は、かつて長州藩時代に密航し御世話になったマセソン氏に新しく日本に設立する工業技術カレッジの教員採用を依頼した。岩倉使節団一行は、2週間、スコットランドを訪問しグラスゴウでも大歓迎を受けた。伊藤博文は、1863年に他の長州藩士4名と共に、ジャーディン・マセソン社の世話でイギリスへ密航した盟友の山尾庸三がロンドンからグラスゴウに移り、「邦人初の西欧世界での徒弟」としてネイピア造船所で修業しアンダーソン・カレッジの夜学に学んだことから、グラスゴウに精通していた。伊藤は、長州事件の報を聞きイギリスとの戦争回避のため帰国したが、山尾は明治維新成功後、帰国した。伊藤は、明治日本を同じ小さな島国でありながら世界に君臨する英国を模範とする工業化成功を目指し、山尾と共に近代技術習得のカレッジ構想を練った。このダイアーと山尾が工部大学校で再会し、両者の協力で当時の世界最先端のカレッジの実現を見る至るのである。ダイアーは、工部大学校生に「エンジニアは真の革命家であり、市民となり、同胞の精神的福祉を向上させる人となる」と訴え、エンジニアは生涯学習の必要ありとして日本土木工学会を発起させた。ダイアー自身、ダーウィンの「生物進化論」の影響下に、当時のスコットランド技師達の信ずる「社会進化論」の信奉者であり、明治日本は技術教育の歴史的成果を問う実験場であったに違いない。ダイアーは1882年5月にスコットランド・グラスゴウへ帰国し、その背景には、わが国の教育組織の変革、つまり給料の高い外国人教師から邦人教師への切り替え、また国際的には彼等の給料として渡された銀価値の下落によるお雇い教師団の生活の逼迫が挙げられる。ダイアーは、自らの信ずる「社会進化のダイナミックスの主人公こそエンジニアである」との主張を固持した。帰国後の最初の著書『工業進化論』(The Evolution of the Industry, London, Macmillan 1895、邦訳 坪谷善四郎訳 博文堂 1896年)を発刊するが、英国でもアカデミックな学者からは嫌われ、「生活協同運動」を支持する急進的な社会改革論者としてのレッテルを貼られ、また同訳書は日本で発禁書となった。この背景には、1870年代にイギリスをモデルに近代化を目指した筈の明治日本が、プロシアが立憲君主制を確率し1880年に普仏戦争でフランスを破り、急速に近代化・工業化を進める姿に感銘を受け、イギリス型民主主義からプロシヤ型に、その路線変更をしたことが挙げられる。

ダイアーの功績について、彼を後継して第2代都検となったダイバー(Divers)は「日本人の養成に何らかの貢献をした」と主張するエンジニアの数は多いし、またなかには、かなりの貢献をした人もいるけれども、真実と公正をもって言うことは、日本がその組織立てられた精巧な工業教育制度をもつに至ったほとんど唯一というべき恩人は、現在グラスゴウ・西部スコットランド西部短期大学の理事の一人であるグラスゴウのヘンリー・ダイアー博士である」と讃えている。彼の評価は日本国内では、彼の政治イデオロギーの急進性を警戒した明治政府が彼の著書を発禁書として我が国の歴史からの消去を図りながらも、他方では、近代日本を欧米世界に紹介するダイアーの仕事を当時の日本にとって大変に貴重であり、それを評価して1902(明治35)年に東京帝国大学から「名誉教授」称号、同年外務省から「帝国財政及工業通信員」に任命したのである。

学術世界への復帰の道を閉ざされたダイアーにとっては、グラスゴウの持ち帰った資料書籍をもとに、さらに自らが愛情と情熱を注いだ工部大学校の教え子達からの最新の日本情報をもとに執筆したのが、『大日本・東洋のイギリス、国民進化論の研究』(Dai Nippon, The Britain of the East, a Study in National Evolution, London, Blackie & Son, 1904)である。そしてダイアーは、日本の急速な成長を評価しながらも、他方では日本の将来を憂慮し、カント(I. Kant)の『恒久

平和論』の3点を挙げ、エンジニアの貢献で世界は狭くなり、民主主義勢力の台頭による国際関係、知識の拡大と社会科学の進展による真理探究、これらを通じての世界平和の実現の歴史における日本の先導的役割を期待した。しかしその後の歴史は、私達の知るところである。日本の国民倫理は軍国主義一辺倒になり、第一次世界大戦では友好国で残ったものの、第二次世界大戦では敵対国として戦うことになる。ダイアーは、その悲劇をみることなく1918年に没したことが、せめてもの救いであつたらう。

『大日本』の意義を述べると、19世紀後半欧米社会で最も関心のあった西欧知識人の関心を背景に、また欧米との不平等条約改正による近代国家の地位確立を願う日本政府の期待をもとに、幕末の封建時代から明治維新、さらに近代化・工業化を進めてゆく全体のダイナミズムを進化論的な観点から当時入手できうる最新資料をもとに、世界史的関心から、また日本社会経済・産業・教育の全体の歴史の変遷、特に幕末期からの日本と世界の関係性を観点に執筆したものである。ダイアーの一世紀前の日本に関する記述を通じて、彼の深く愛情溢れる日本理解にも大きな感動を受けられると思うが、それ以上に一世紀前の彼のメッセージの数々が今日でも褪せることなく私達に話しかけてくる。日本は不幸にも第二次世界大戦を引き起こすが、ダイアーの信じた近代日本は平和主義の国であり、アジア近隣諸国の向上に尽くす国であった。そのダイアーの期待を一度は裏切ったが、今21世紀を目前にして、日本は再びダイアーの願ったような平和な工業国にならねばならないと思うのは私だけではないと思う。(KITA Masami, 創価大学経済学部教授・経済史, グラスゴウ大学1979-80)

英国でのワールド・カップ

橋都浩平

この原稿を書いている現在、フランスではサッカー・ワールドカップが行われているが、日本の初参加もあり国内でも大変な盛り上がりを見せている。6月14日の日本-アルゼンチン戦のテレビ視聴率は60%を越える記録的なものとなったことである。このニュースを聞いているうちに僕が英国に留学していた1982年にもワールドカップがあったことを思い出した。

その年僕は奇跡的にBCスカラシップに合格したが、よほど英語のテストの成績が悪かったのであろう、3カ月間の英語の研修を義務づけられ、割り当てられたのがロンドンから列車で1時間ほどのエセックスの小さな町コルチェスターであった。この町は名前の示すとおりローマ時代からの城塞都市で、街の中心には城の廃墟と公園があり、坂と川のある美しい町であった。英語学校は街の中心から西寄りの静かな住宅街にあり、古い邸宅を改造した素晴らしい環境にあった。ここで僕は3カ月間を過ごしたわけであるが、世界各国からの留学生と過ごすのは初めての体験であり、今から思い出しても充実した本当に楽しい時を過ごすことができた。この学校での僕の第1の親友はジュリオというブラジル人で、やせて長身でやや縮れた黒い髪をしており、少し悲しげな目をしたキリストを思わせる風貌であった。彼も医者であったため、また音楽の趣味も合ったため仲良くなり、いつも行動をともにしていた。彼は僕から見ると、少なくとも話し言葉に関しては、3カ月間の英語の研修など必要ないと思えるほど英語が上手で、英語学校の授業を完全に馬鹿にしていた。そして学校の授業よりもパブに行くほうが何倍も英語の勉強になるというのが持論で、実際に毎晩学校の近くのパブに現れては、1ガロン(8ポイント!)のビターを飲むのを日課としていた。僕も彼の持論を検証すべくパブにつきあい、こちらは2ポイントのビターを日課としていた。

さてこの英語学校にはBCのスカラーの他にも生徒がいたが、最大の勢力はリビア人で、いつもカダフィのグリーンブック(毛沢東語録のようなもの)を持ち歩き、パブでイギリス人のパンク達と喧嘩を繰り返していた。僕たちは彼らはカダフィが国際的テロリスト養成のために送り込んできたのかと噂し、なるべく近づかないようにしていた。この他にイタリアとフランスからパイロットのグループが参加してきており、彼らとBCスカラー達とは仲良くつき合っていた。

さてこの英語学校在学中にちょうどスペイン・ワールドカップが始まったのである。この年のブラジルはジーコの全盛期で、その他にソクラテス、ファルカン、トニーニョ・セレーゾといったタレントを擁し、予選から圧倒的な強さを誇っていた。現在でも史上最高のサッカーチームだったとの評価が高いチームである。地区予選でも圧勝しワールドカップ本大会の1次リーグも全勝、誰もがブラジルの優勝を予想していた。そして2次リーグでイタリアと対戦したのである。英語学校でも当然のように皆で観戦しようということになり、午後授業終了後にテレビの前に大勢が集まった。ブラジル人はジュリオ1人であったが、彼は勝利を確信してテレビの正面に陣取った。その周りをイタリア人グループが取り囲むという形になった。

この試合はワールドカップ史上最高の試合と考える人が多いが、実際これほどに技術レベルが高く、しかもスリリングな試合は僕も見たことがない。予想に反してイタリアがロッシの活躍と伝統の堅い守りでリードを保つ展開となったが、ブラジルも素晴らしいゴールで追いつき、勝敗の行方はわからなくなった。実はブラジルはこの試合は引き分けでも準決勝進出であった。しかし王者のプライドが許さなかったのか、後半は圧倒的に攻めており必ず得点できると思ったのか、引き分けを狙わずに攻め続けた結果、カウンターをくらってこれが決勝点となりイタリアに破れてしまったのである。試合終了の瞬間のイタリア人達の喜び様とジュリオの打ちひしがれた様子は今でもありありと思い出される。イタリア人達もジュリオのあまりの落胆ぶりに、さすがにその後の大騒ぎを控えたほどであった。結局このワールドカップではイタリアがそのまま優勝し、このブラジル-イタリア戦が事実上の決勝戦であったことを皆に印象づけたのであった。この試合についてはジーコも最近、『世界のサッカーを変えた試合であった』といい、『ブラジルが勝っていれば世界のサッカーはもっと攻撃的な美しいものになっていたはずだ』と言っている。

さてその後ジュリオはロンドンで、僕はバーミンガムで勉強することになり離ればなれになってしまった。日本に帰ってから数年は文通していたが、現在では音信不通となっている。しかし今現在どこかで、おそらくブラジルでワールドカップを観戦しているに違いない。試合ごとに狂喜と落胆を繰り返しながら。

僕が行ったバーミンガムにはヨーロッパ・チャンピオンにもなったことのあるアストン・ヴィラというサッカーの名門チームがあり、5歳の息子を連れてスタジアムに観戦に行った。ショップで息子にアストン・ヴィラのチームカラーの赤紫のユニフォームを選んでやっていると、まわりにファンのおじさん達が集まってきて、『似合う』、『似合う』と口々にほめてくれ、息子もまんざらではない様子だった。試合のほうは残念ながらロンドンから遠征してきたアーセナルにさんざんにやられてしまったが、英語学校でのワールドカップ観戦とともに、英国でのサッカーに関する楽しい思い出である。

(HASHIZUME Kohei, 東京大学医学部付属病院小児外科, Birmingham 1982-1983)

いい思い出, 嫌な思い出

椎名重明

これまでイギリスには何回か行ったが、そのうち少なくとも3回はBritish Councilのお世話になった。

最初は1958年に、初めて留学した時である。日本史専門の教授が1年間の予定でOxfordに行くことになり、イギリス史を専攻する助手の私も、急遽出かけることにした。滞在費はアメリカの財団(Asia Foundation)からもらい、帰りの旅費は文部省から支給されるという条件で、当時の在日イギリス大使Redmanさんに相談したら、まずBritish Councilに行くようにということで、紹介状を書いてくれた。そればかりか、留学希望先のレスター大学・イギリス地方史学科の学科長あてに手紙まで書いてくれた。初めての経験でなにもわからない私は、invitation letterが必要だということも知らなかったのである。

BOACの南回りのジェットプロップ機に乗り、1月半ばの夕刻ロンドンについた。British Council本部の人が飛行機の近くまで車で出迎えてくれ、そのままホテルに直行した。LeicesterにはBritish Councilの支部はなくaccomodationその他は本部で世話してくれた。それは赤い煉瓦造りのprivate hotelで、2階のダブル・ルームの窓からは、色とりどりのバラの咲いている緑の芝生の中庭が見下ろせた。

当時、レスターには私のほかに日本人は一人もおらず、大使館から送られてくる在英日本人数十名の名簿のなかにも、知人はほとんど見当たらなかった。滞在費にはかなり余裕があったものの、British Councilからもらった*How to live in Britain*とレスター大学のJ. Simons教授の小著*City of Leicester*を頼りにはじめた日常生活には、いざさか心細いものがあった。

しかし、研究生生活の方は順調に進んだ。イギリス地方史学科の学科長Finberg教授からSenior Common Roomのメンバーの証明書を手渡され、何人もの研究者に紹介された。今日にいたるまで親交の続いているJoan Thirsk女史はsenior research fellowだったが、何かと相談にのってくれた。当時、図書館には<Hatton Room>というのがあって、地方史学科の本が州別にならべられていた。イギリス市民革命期の土地問題と産業革命期の農業問題という2つの研究テーマについて、各州の史料を読み、ノートをつくった。欲しい本はCounty Record Officeの近くの古本屋(Haliday?)や、ロンドンのGeorge Hardingsとか、オックスフォードのBlackwellやParkerなどで買った。手にはいらぬものは、必要な部分をカメラでコピーした。ペンタックスに短い三脚をつけて、ファインダーを覗きながら複写するのは、なかなか大変であった。そのために買ったunspooled filmの空缶は、いまもいくつか残っている。産業革命期の研究成果は1冊の著書になったが、市民革命期の方は、数篇の論文が、著書にならずに、そのまま残っている。

イギリス滞在中に私が名づけ親になった子が2人いるが、その後一度もあっていない。方々を旅行したときに撮ったプロジェクター用のカラーフィルムは、保存がよくなかったのでダメになってしまった。

1968年に数ヶ月間ロンドンに滞在したときも、British Councilの世話になったようにも思うが、はっきりしない。1979年に、Oxford, Leicester, Leedsを訪れたときは、アポイントメントやホテルの手配から、車での送迎まで、すべてBritish Councilの世話になった。レスター大学では、私の留学当時research assistantだったProfessor Everittと再会した。イギリス地方史学科は新築の高い建物の中にあり、学生たちはpater nosterを利用してはいたが、私たちは扉のある方にした。

Professor Everittのいるうちに40周年を迎えたイギリス地方史学科は、今年は50周年を記念して、Hoskins' memorial

lectureをおこなった。講師はDr. Joan Thirskで、最初にレスター大学にきた日本人留学生として、私の名をあげたと知らせてくれた。

レスターでは、在宅のままBritish Councilの委託業務を行う主婦の世話になったが、彼女の案内で、郊外の"pick your own farm"なるものをみせてもらった。留学時代に下宿していたprivate hotelの老夫婦は、隠居して郊外の小じんまりした住宅に住んでいた。どうしても泊まって行けというので、一泊し、昔話をした。この年のレスター訪問は、私にとっては、いい思い出になった。

オックスフォードでは、Law Libraryで調べものをし、St. Hilda's CollegeでThirsk女史にあい、さらに彼女の家で夫妻と共に久しぶりに楽しく食卓を囲んだ。

リーズに行ったのは、Mr. Longに会い、頼んでおいた1871年のYork Spring AssizesのSt. Quintin v. Lettの裁判記録のコピーを受け取るためであった。その数ヶ月まえに奥さんを亡くされたロングさんは、以前よりも元気のない様子であった。二人で庭のテーブルでお茶を飲みながら話をした後、夫婦で何年も日本にいたという隣の家につれていかれた。玄関の上がり口にはスリッパが揃えられており、日本式に靴を脱いで上がるのであるが、ロングさんは、腕を支えてもらわないと履き替えがうまくいかなかった。Quintin v. Lettの裁判記録をつかった私の仕事は、書棚に大切に保管してある思い出のコピーとともに、忘れ難いものがある。

1987年には、2回イギリスにいった。東京大学を定年でやめてから移った帝京大学で、イギリス分校設立の任務に携わることになった。この任務は私にとっては荷が重かった。おぜん立ては、ほとんどすべてBritish Councilの日本代表だったBamettさんにして頂いたし、イギリスでのスケジュールも、British Councilのロンドンの本部の人たちの指示に従ってこなすだけといってよい。それでも、2週間で7大学とポリテクニクス1校を回り、多くの関係者たちと折衝するという仕事は、持病のある私には相当苦痛であった。雇われの身の不自由は先刻承知とはいえ、予想だにできなかったことが起き、相手にひどく失礼なことをしたという思いは、このほか私を苦しめた。過去形で公けには語れない事柄は、修復しえない傷、心を苛む嫌な思い出として、今なお残っている。

(SHIINA Shigeaki, 東京大学名誉教授)

はがき通信

アイザック・ニュートン数理科学研究所

ニュートン力学の確立に至った歴史的著書"Principia"の出版300年を記念する形で、上記のアイザック・ニュートン数理科学研究所がケンブリッジ大学に所属して創設されたのは1992年でありました。毎年研究プログラムが催され、6カ月プログラム、あるいは4カ月プログラムがあって、合わせて4ないし5種、時代の最先端の数理科学のテーマが選ばれ、一流の研究者が招待され、世界をリードする形で開催されています。たまたま、英米の流体力学者と共に私を含む4名で紀元2000年の研究プログラムを提案しましたところ、数学者の強い支持が得られて、開催が承認されることになりましたので、ご報告します。

プログラム：流体運動の幾何学とトポロジー

期間 = 2000年9月4日 ~ 12月15日

(報告 = 神部 勉 東京大学理学系研究科教授物理学)

イギリス人は幽霊がお好き(その2)

佐藤茂男

今回は、1862年の創設以来、長年にわたってありとあらゆる心霊現象を調査研究し幽霊関係の資料の収集に努めてきた、ロンドンを拠点とする幽霊愛好会(Ghost Club)の会長で、当代イギリスナンバーワンの幽霊狩人と言われている P. Underwood 氏による著作 "Haunted London(1975)" から、コラーシム劇場の幽霊、ロンドン塔の熊の幽霊、そして自殺の名所テムズ河北岸通りの幽霊の3つの幽霊話をご紹介します。

今回も前回に引き続いて Underwood 氏の語る、ロンドン大学の一つユニヴァーシティ・コレッジに出没するベンサム幽霊の話と、かつて絞首台のあった場所に建つ有名なパブ「トマス・ア・ベケット亭」にまつわる怪奇現象の話をご紹介しますことにしましょう。

(1) ユニヴァーシティ・コレッジの幽霊

ユニヴァーシティ・コレッジは、昔、ブルーム卿、T.キャンベル、J.ミル、J.ベンサムなど大学創設者たちの意思にもとづいて宗教的拘束を受けない自由な大学として創設された大学であるということで、「神なき大学」とあだ名が付けられていた。ベンサムは法の改革者であると同時に自然科学者でもあったが、彼の草した原稿類が現在でも大学に保管されている。

そのベンサムの幽霊がユニヴァーシティ・コレッジに出ると言われている。冬の季節、夕方ともなるとベンサムが杖をコツコツコツと打ちながら歩いてくる音が聞こえてきたと証言する人が何人もいる。また、ベンサムの幽霊を実際に見たという報告もある。それによれば、ベンサムの幽霊は風変わりな格好をしていて、例の白手袋をはめ、生前に彼がつねに持ち歩いていた「ダブル」と呼ばれる散歩用の杖を携帯しているという。

数年前のことである。大学で数学を教えているニール・キングという先生も、そのようなことがあったと自身の体験を語っている。この先生は冷静で現実的な男である。彼はある晩、夜遅く研究に取り組んでいた。するとコツコツ、コツコツというステッキの音が研究室の方に近づいてくるのが聞こえてきた。びっくりした彼は、しばらくの間じっと耳をすまして聞いていた。それはステッキの音であることに間違いなかった。どんどんとこちらへ近づいてくる、と思っていた途端、ステッキを突く音は研究室を通り過ぎていってしまった。彼は急いで椅子から立ち上がり、ドアを開けてみた。物音がした廊下は、視界を遮るものは何もなく、端から端までずっと見えた。まさかこんな遅い時間に誰もいるはずはないと思っていた。ところが、ひょっと気がついてみると、なんとそこにジェレミー・ベンサムが歩いていたではないか。白手袋をはめ、杖を持ち、廊下をコツコツ、コツコツと鳴らしながら歩いていたのである。ベンサム自身は、目をパッチリと大きく開けて通路を眺めていた数学者の存在にはまったく気づいていなかったようだった。

ニールはベンサムの幽霊との思わぬ遭遇にびっくり仰天し、動けなくなっていた。彼は、不思議な幽霊が自分に向かって真っすぐやってくる間、一步も後退りすることなくじっと立っていた。幽霊は近づいてきて危うくニールにぶつかりそうになったと思った途端、突然サッと前へ進み出て、ニールを目がけて体ごと身を投げた。しかし衝撃を受けた感覚はまったく感じられなかった。ベンサムの姿もステッキの音もすっかり消えていた。

ベンサムは哲学史上極めて重要な人物だ。彼の功利主義が急進的な政治に大きな影響を与えたものの、しかし、人間の死体をミイラにして永遠の記念物(彼はそれを「自己聖像」

と呼んでいた)として保存すべきであるという彼の考えは、あまり広く受け入れられはしなかった。そのお陰で、雨風に晒されて風化したり腐敗したりしないように死体の表面にニス塗りをした祖先たちのミイラが車道にそって並べられるという習慣は生まれなかったのである。したがって現在では、モスクワのレーニンミイラや、ごく最近まであったロンドンのセント・ジェイムズ教会の身元不明の男性のミイラ以外に、私たちはミイラ化した死体を目にすることがほとんどないわけだ。

生前、自分の死体の処理について熱心に話していたベンサムであったが、生前によく身につけていた衣装をまとった彼のミイラを、私たちは現在でも見ることができる。ベンサムのミイラは、防虫用のガラスケースに入れられて、ユニヴァーシティ・コレッジの玄関ホール近くの歩廊に保存されている。ミイラのベンサムは、生前よく座っていた椅子に鎮座し、片手に例の「ダブル」と呼ばれるステッキを持ち、白手袋をはめている。しかし、頭部のミイラ化が不完全であったため、数年後になってフランスの著名な芸術家の手によって作製された蠟製の肖像に取り替えられることになった。本物の頭部は切り離され、別に保存されている。

ベンサムの歩く足音や杖をつくコツコツコツという不気味な音が、人通りのまったくないユニヴァーシティ・コレッジの廊下から聞こえてきたという報告が、今なお繰り返し繰り返し寄せられている。ある教室などでは、時折り書籍類がそこから中にメチャクチャに散らかされているということもある。

このような騒霊現象が見られるのは、ジェレミー・ベンサムの幽霊がユニヴァーシティ・コレッジに住みついているためだと考えられている。ある時、まるで「空中を飛ぶ翼」が発したかのような、かん高い音がして来たため学生がびっくりしたという事件があった。それは、夜遅く、誰もいない廊下でのことであった。この学生はあまりの怖さに、幽霊を待ちうけていて、こちらに歩いて来る不思議な足音を聞いてみようなどという気にはとてもなれなかった。

(2) 「トマス・ア・ベケット亭」の幽霊

オールド・ケント・ロードの街道筋にある「トマス・ア・ベケット亭」は、かつて18世紀頃の絞首台があった場所に建てられたパブだ。

このパブは、かつては「ボクサーのパブ」という名前でも知られていたが、その名の由来は、こうだ。昔、パブの二階がボクシング・ジムになっていて、ある世界タイトルマッチの挑戦者がそのジムで練習をしていた。それで「ボクサーのパブ」と呼ばれるようになったというのである。

アーサー・ウオード氏は5年間ほど「トマス・ア・ベケット亭」の店主をしていたが、ある時、物凄い騒ぎが起きて、パブで一人で眠っているなどとても怖くてできなかったという怪事件が起きた。飼っていた猫も犬も最上階まで上がっていきこうとはしなかったというのだ。寝室のドアというドアはすべて開かなくなり、警官や消防士たちはドアをぶち破って入らなければならなかった。また、このパブは石炭などまったく使っていないにもかかわらず、どうした訳か、石炭が点火できるばかりの状態で盛られているというような怪事件が何度となくあった。

ある時、一人の客がやって来てパブでビールを飲んでいて、この男は幽霊が出るなどという考えを馬鹿にしていた。ところが、彼は手に持っていたビールのジョッキが目の前で粉々に壊れてしまうのを目撃することになったのだ。また、アルバート・ウィリアムズなる客は元気盛んな肉屋を営む男であったが、自分は幽霊などちっとも怖くないと豪語し、真昼間、たった一人だけでパブの最上階の部屋で半時間く

らい過ごすという賭けをバブの主人とした。客は主人から5ポンドを受け取り、さっさと階段を上がっていった。ところが、ものの2分もたたずに二階からワラワラと駆け降りてきて、さっさと5ポンドを返してしまっただけだ!

* * *

今回は、かの有名なカール・マルクスの墓があることでよく知られる巨大なハイゲイト共同墓地に出没する吸血鬼の話と、生命のない物の幽霊だって存在するということを証拠づけるような、ノース・ケンジントンの交差点に現れるバスの幽霊の話の2つをご紹介します。ご期待ください。

(SATO Shigeo, 東北学院大学教養学部教授, University of Wales Institute of Science and Technology, 1968/69)

英国留学の思い出

橋本正己

私は1956年から57年にかけて、WHOフェローとして1年間ロンドン大学のSchool of Hygiene & Tropical Medicineに留学しました。当初米国のカリフォルニア大学を志望許可を得ておりましたが、英国で世界三初のThe Clean Air Actが簡定され、私は当時写生省で公害対策基本法の準備をしておりましたので、急遽英国に変更したわけです。

しかし当時はまだ英国の対日感情も良好ではなく、ロンドンでは殆んど日本人を見ませんでした。大学の近くのRussel Squareの小さなホテルに滞在しておりましたが、大英博物館がすぐ近く、2時間の昼休みには博物館に行きました。当時の博物館では日本というセクターは大変狭く、富士山と芸者、それに肥料車を引いてる人の姿だけでこれが日本人の職業のひとつだ、と書いてありました。

当時学長の講義で強く印象に残っているのは「イギリスの歴史は一度も駆け足をしたことがない」ということで、特に戦後駆け足を駆け足を続けている日本を痛感致しました。

またその年には丁度スエズ動乱が勃発し、教室でエジプトの留学生と英国の学生が乱闘する騒ぎがありました。一方その年の暮れにはロンドンで2番目の激しいスモッグがあり、昼間から真暗くなって多くの老人が死亡しました。

またClean Air Actにより石炭の使用が禁止されたため「政府は無料で無煙炭を配布せよ」という主婦たちの大規模なデモがあり、私もついて行きましたが、率直に言ってロンドンの住宅は多くの煙突を担いでいる格好でむりもないと思いました。また街に出ると「お前日本人だろう、俺はレイテの生き残りだ。これを買え」などと云はれ「レイテには行っておりません」と云っても無駄でした。

その年はロンドンでクリスマスを迎えましたが、プロテスタントとしての私に強い印象を与えたのは、「クリスマスはドンチャン騒ぎをする時」と考えている東京に比べて、ロンドンではその日ホテルの従業員も商店街も正午で仕事を中止し、午後は帰宅して家族とともに静かにクリスマスを祝っているということでした。

何れにしてもロンドン大学は私の母校です。その後約20年たって、長男一家が大手商社でロンドン勤務になった際、またロンドンを訪ねましたが、その変わりようは驚くばかりでした。皆日本人に親切で街を歩いていてもかつての時代とは打って変わった雰囲気、大英博物館に行っても日本のセクターは素晴らしいものになっていました。その後公用で何度もロンドンに行きましたが、すべてが素晴らしいものでした。

しかし当時のSchool of Hygiene, Tropical Medicineは昔のまま私と同窓生として温かく迎えられ感無量の思い出でした。(HASHIMOTO Masami, 国立公衆衛生院・名誉教授, National Institute of Public Health, London University, School of Hygiene & Tropical Medicine 1956/57)

近代統計学のルーツ探索とフレンチ・ホルン

林 知己夫

妙なタイトルがついているが、これは私と英国とのかかわり合いなのである。昭和30年度に戦後はじめて、文部省在外研究員制度が復活された。幸いにして、これに指名され出張することになったが、日本に外貨がない時代であったため、その持ち出しが出来ず甚だ苦勞の種であった。今日では考えられないことである。日銀や旧東銀や親戚の人に頼んで、在ロンドンの出先の人達、三菱商事の方を紹介してもらい、心の支えとした。また、British Councilの御世話になるのがよいと伯母に紹介してもらい、確か、日本橋にあった事務所にDirectorを訪ねて御願いしたことを覚えている。このルートを通じロンドンで大変御世話になった。十分に活動できたのはそのお陰と思い、今なお感謝しているわけである。

当時は、アメリカ一本槍で、誰でもアメリカへ勉強に出かけた。しかし、私にはアメリカ統計学は肌に合わず、あまりにも形式的であったのには馴染めなかった。近代統計学は英国に始まった。その中心人物は、K. Pearson、であり、ついで、R. A. Fisherにおいて止揚され著しく発展した。K. Pearsonの子息のE. S. PearsonはJ. Neymanと共にFisherとは別の発展を行った。Fisherの考えは極めて直観的であり、現実的であるが、具体的な科学の不文律のようなものに根ざす所が多く、数学にのみ狎れた人々には理解し難いところがあった。Fisherの弟子であるNeymanが、先生の理論を誰にでも理解できるように数学化して統計学を書き上げた。Fisherはこれを見て驚き、「お前は俺の統計学を一寸も理解していない」と一喝して破門したという話を聞いたことがある。

このNeymanの統計学がアメリカで主流となっていたのである。私の師であった佐藤良一郎先生は英国で統計学を勉強し、特にE. S. Pearsonと同門であった関係で紹介して頂きLondon大学のUniversity Collegeへ行く事にした。私もNeyman流の統計学に疑問を持ったことと、日本ではFisher流、Neyman流が混同され基礎なところが一向に解らなかつたこともあり、近代統計学の源を知るために英国を選んだのである。イスラエル・トルコ・スウェーデンへ寄り道をして知見を広め---それぞれに統計学の優れた研究者がいたし、イスタンブール大学は私のよって立つ確率論の創始者であるRichard von Mises (positivismの立場に立つ人)のいたところでもある---ロンドンへ着いた。3月の終わり頃であったと思う。佐藤先生は大正の終り頃英国に留学されたが、先生から伺ったロンドンを目のあたりにする感じであった。今日と違いとても奇麗であった。しばらくしてBritish Councilへ行き、いろいろ御世話になることにした。行ってみて驚いたことにすべて連絡済みでアポイントメントをとったり、知らぬ先生を紹介してくれたり、切符の手配まで至れり尽くせりであった。全く感心してしまった。来ている人は各種、各様であった。植民地の人々の教育のための組織でもあったし、優れた植民地政策と感じたのである。これほどでないにしてもアメリカの戦後の膨大な数の日本人知識層のアメリカでの再教育のあり方もこれに類したものがあつたように思う。

これが今日の親米基調となっている。それにしても日本では、こうした心のもった組織はない。大蔵省流の目先の投資効果を問題にする行き方と一種の悪平等主義のために政府としては何も出来ていないし、特種法人や民間の財団もないのである。これに気付くおらかな特志家が出て欲しいものである。

いずれにせよ、こうしたなかで英国留学を楽しく過ごすことが出来、近代統計学の発祥地においてその特質を掴むことが出来た。当時のことだからそう多く歩いたわけではない。ロンドンを中心にケンブリッジ、オックスフォード、ドーヴァー、マンチェスター、リヴァプール、エディンバラ、ア

パティーンに行って面白い経験をした。

クラシックが好きだったので一週間に5晩位、ローヤルフェスティバル・ホール、ローヤルアルバート・ホール、コヴェントガーデン、オールドヴィックに通い、諸種のクラシック音楽、バレエ、シェイクスピアの芝居をたしなんだ。その時は、私はフルートをやっていたので、それに心を奪われ、フィルハーモニアにいたDennis Brainという稀代のフレンチホルンの名手の演奏が心に残っていない。残念なことであった。彼は私の去った次の年1957年に自動車事故で死んでいる。確かに聞いていた筈である。今にして思えば口惜しいことであった。

後年、カラヤン指揮、フィルハーモニア楽団のバックにデニス・ブレイン奏でるモーツァルトのホルン協奏曲のLPを聞いて一驚した。このように素晴らしいホルン、いや音楽に接したことはない。フルートをやめホルンに転向することにした。先生は幻のデニス・ブレインである。手に入るレコードをすべて集め、それに聞き入りながら、その音を狙って、その表情を心に秘めて練習を始めた。デニス・ブレインの吹いていたのと同じドイツのアレクサンダーのBbホルンを愛用した。この楽器で吹き難い曲は、英国の名器といわれるPaxmanのHigh F-Bbホルンを愛用している。ロンドンへ行くとき必ずこの楽器店に立ち寄ることになっている。「妙な取り合わせ」と書いたが、異なるものが何等かの接点を持ちつつ、私の今日に影を落としているのである。これらが私にとっての「心の中にある英国」なのである。

(HAYASHI Chikio, 統計数理研究所元所長・名誉教授, London University, University College, 1956)

ジュネーブにて英国を想うの記

河田守弘

私は85年から86年にかけてFCO奨学金のお世話になり、ロンドン大学大学院に留学、国際(航空)法の泰斗であるBin Cheng教授の下で航空宇宙法の勉強をさせていただきました。留学中に習得した知識は年々衰えていくばかりの不肖の弟子ですが、今でも航空関係者と話をするときCheng教授の近況などが共通の話題になることが多く、先生及びプリカンには大変感謝しております(全くの余談ながら、航空宇宙法の名簿に最初この専攻分野名を登録したところ「大気及び空間法則の研究」との訳が載り(編集者が理科系の方であったことが推察されます)、この分野が認知度という点で如何にマイナーなものであったかを認識した次第です)。その後、本来の勤務先である運輸省から外務省に出向となり、96年6月より在ジュネーブ国際機関日本政府代表部に勤務、現在に至っています。彼我の文化の差という点に思いを致すとき、ここジュネーブは相当に特殊な町であると言えます。今年の2月に民間研究機関がスイス国民の意識調査を行ったところ、「あなたは何れの組織に最も帰属意識を感じますか」との問いに対し、フランス話圏スイス(ジュネーブ、ローザンヌ周辺)の人々の答は、まず第一に「居住市町村」、続いて「ヨーロッパ」、5位になって漸く「スイス連邦」が顔を出す、という回答だったそうです(この点、ドイツ語圏スイスの人々は圧倒的1位に「スイス連邦」を挙げており全く様子が違います)。EUへの加盟の是非を問う国民投票でも、フランス語圏だけは常に賛成票が反対票を上回っており、住民の心が広くヨーロッパに開かれていることがわかります。言い換えればそこに住む外国人(特にフランス語が全く不如意な自分のような人間)にとっては異質文化との軋轢に余り苦しむことなく生活できる場所であり、このことはジュネーブが多くの国際機関を受け入れ得た重要な遠因の一つではないかと思っています。

このような訳で、私自身の意識としては、今(スイスというよりも)「ヨーロッパ」に住んでいる、ということになるのですが、この「ヨーロッパ」で英語をほぼ唯一のコミュニケーション手段として仕事をし、生活している以上、英国及び英国的なものとの接触は、赴任前の予想をはるかに超えて濃厚なものとなっています。

一日の生活は、通勤の車中でBBCワールドサービスのニュース(地元の英語FM局が中継)を聞くことから始まります。10年前の留学中に聞いたのと同じ時報前のメロデー(地元アナウンサーのメッセージによって消されてしまうことが多いのが残念ですが)が聞こえると、ロンドンでの気儘な学生気分が蘇り、えも言えず幸せな気分になります。家内は週に2回、ご近所の英国人夫人に英語を教わっています。「生活にすぐに役立つ英語を」とお願いしたところ、Excuse me, is this the end of the queue?といったようなロンドンの香り漂う表現を数多く教えてもらっているようです。インターナショナルスクールの幼稚部に通い、優しい優しいMargaret先生(これもまた英国人)の薫陶を受ける我が息子は、時々私の訛った発音をQueen's English「風」に矯正してくれます。現在の仕事の上でも英国からは多くのことを学んでいます。多数国間会議に臨む各国の態度にはそれぞれ特徴がありますが、英国の場合、冒頭から自国の主張を声高に叫ぶというよりも、各国主張に慎重に耳を傾け、議論が膠着してきたような段階で説得力のある発言を簡潔に行い、結局、英国の主張どおりに事が決する、という場面が多いような気がします。協定のドラフティング作業などで修正案を出そうとして巧い表現が思い浮かばず、相談に行くと、その修正内容が自国の主張に沿ったものでないにもかかわらず親切にアドバイスしてくれるのも英国人です(個人レベルの問題であると言ってしまえばそれまでですが)。

ジュネーブにおける最も重要な国際機関の一つであるWTO(世界貿易機関)においては、英国は交渉権限を欧州委員会に委ねており、英国代表の発言を直接議場で聞く機会が無いのが残念ですが、巧妙かつ粘り強いIECの交渉力の源泉をたどれば、そこにはブリュッセルでの調整過程を通じて濃密に注ぎ込まれる英国のWISDOMが隠されているものと信じています。休暇が取れると足はどうしても英国を向きがちで、赴任以来1年半で4度の訪英を数えています。ロンドンの中心街や下宿していたHighgateあたりの町並みが10年前と少しも変わらないのは嬉しい限りです。ただ、Me & My Girl, Starlight, Les Mis, Phantom等の作品が続々と封切られた80年代半ばに比べ、ウェストエンドにやや元気がないような気がするところは寂しいところです。以上、ジュネーブにて英国について思うところをとりとめもなく書いてきました。当ニューズレターには学会の先生の格調高い文章が多く、やや気後れしてしまうのですが、プリカンに御恩を感じる多くの人々の中には、私のような、およそアカデミックな世界と縁遠い人間も含まれていることを知っていただければせめてもの幸いと思いつつ筆を置かせていただきます。

(KAWATA Morrihiro, 運輸省, University College, 1985/86)

はがき通信

元川永善

1年間SOASで開発学を学んだ。経済成長率というものさしで途上国の発展度合いが語られることが多い中で、ここSOASでは社会学や文化人類学的アプローチを取り入れた総合的な"human welfare"追求の姿勢を学ぶことができた。現在はコースの中でも頻繁にケーススタディとして取り上げられたインドで勤務する機会に恵まれ、まさに自分の生活をかけて各種の開発理論の実証性を確かめているところである。(MOTOKAWA Nagayoshi, 日本輸出入銀行ニューデリー駐在, SOAS, 1995/96)

イギリスの思い出

荒木一雄

イギリスには2回行っている。1回目は1972年である。9月13日から11月12日までの2ヶ月滞在した。「初期近代英語の発音の研究のため」という用務のための、当時奉職していた名古屋大学の学長命令によるものであったので、2ヶ月の大半は、昼間は大英博物館で過ごした。止宿先の民宿の主人夫妻はポーランド移民で、英語はブローケンであったが、ロンドン大学の学生であったクリッサという名の娘は、ロンドン生まれのロンドン育ちで、話す英語もきれいな標準英語で、夜はよくクリッサとラウンジで雑談に花を咲かせて過ごした。はじめてのイギリスであったにもかかわらず、非常にくつろいで2ヶ月を過ごすことができたのは、一重にクリッサのおかげである。幸せに暮らしていることを心から祈る。同じ民宿にロンドンに英語の勉強に来ていたキャロラインという名のイラン人の娘がいて、キャロラインが通っていた英語学校で出された宿題の答えを、私が教えてやったお返しに、日曜日は、私をロンドンのあちこちに連れて行ってくれた。

2ヶ月間ロンドンから一歩も外に出なかったわけではない。私が書き留めていた「渡英日誌」によると、何せ26年も前のことであるから、私自身の記憶は大分うすれているけれども、9月20日にはウインザー城を見に行っている。それから10月4日にはキャンタベリー寺院を見に行っている。そして6日にはストラットフォード・アポン・エイボンのシェイクスピアの生まれた家を見に行っている。その後、シェイクスピアが葬られている教会を訪れ、シェイクスピアの墓碑銘の写しを16本買って帰った。10本は帰国後名古屋大学の同僚や知人に配ったが、残る6本は今も我が家においてある。

書き忘れてならないのは、帰国する半月ほど前に、オックスフォード大学のジーザス・コレッジに、不朽の名著English Pronunciation 1500-1700, zoos.の著者であるドブソン教授を訪ねたことである。研究社の英語学ライブラリーのために、同書の一部と私が訳述した関係で、ドブソン教授とは手紙を数回やりとりしていたが、いうまでもなく、会うのは初めてである。アポイントメントで約束した時間に訪れると、コレッジの門の所までドブソン教授が出迎えてくれるのに、すっかり恐縮した。職員食堂で昼食を馳走になり、その後、ドブソン教授自身が、ほとんど半日かけてオックスフォードのあちこちに点在しているすべてのコレッジを案内してくれた。今は亡きドブソン教授の御冥福を心からおいのりする。

2回目にイギリスを訪れたのは、4年前の1994年の夏で、妻と娘夫婦と2人の孫を連れての家族旅行であった。滞在期間は1ヶ月であったが、前半はヨーク、エディンバラ、湖水地方を廻り、後半はケンブリッジの民宿に泊まって、ケンブリッジの街をみて歩いた。私は、大学図書館にも行って、その蔵書の大きさに驚いた。

機会を見つけて、まだ元気のあいだに、今一度渡英して、今度はウエールズを訪れたいと思っている。

(ARAKI Kazuo, 名古屋大学名誉教授, London 1972, Cambridge 1994)

Royal College of Artでの研修

森島 勇

私は1986年の冬から春にかけて4ヶ月程ロンドンのRoyal College of Arts で研修をさせていただきました。滞在中にチェルノブイリ事故が報道されましたので忘れられない年です。研修の目的は今でも大変ポピュラーなWilliam MorrisとArts and Crafts Movementでした。その少し前から今程ではありませんがMorrisとそのデザイン活動に関する出版や講演が多くあり、第一次のブームという感じでした。中でもお亡くなりになった明治大学の小野二郎先生のお話しになったN. Pevsnerの<The Sources of Modern Architecture and Design>は何度も読みましたし、先生のお話もお聞きしました。それが英国行きのもちになりました。御退職になった岡和田さんや今もブリテイッシュ・カウンシルに居られる江口さんにご協力いただいて、その研究に最もふさわしい学校としてRCAを選んだのです。書類申請をしてからかなり経って、諦めかけていた頃にカウンシルからお呼び出しがあって、当時の館長だったJ. A. Barnettさん、文化担当のB. Griggsさん、それに経理担当のもうお一人の三人に取り囲まれて面接をうけました。

そのようにしてロンドンへ出掛けたわけですが、RCAへは実は1967年にも旅行の途上に立ち寄ったことがありご縁がありました。その年にモントリオールで万博があり、その折りに世界デザイン会議があって、私はその学生部会に参加したのですが、そのとき同大学の学長だったSir. M. Blackに学生の大胆さで話し掛けて、RCAを見学する事を許してもらったのです。その時には後年ここへ来れるとは思いませんでした。

RCAは大学院のみの大学です。ロンドンにはこのレベルの学校としてRoyal Academyがあり、そちらはfine artsが強く、RCAは創立当時から国のデザイン振興政策の為に設立された学校です。建築、デザイン、工芸、絵画、彫刻、写真と美術全般にわたる科目がありますが、日本の学校よりも実践的で、デザインの場合産業界をリードする力を持っていて、卒業制作展のデザインが盗まれるのを本気で心配するほどでした。Fine Artsの方でもHenry MoorやDavid Hockneyらを輩出しています。

学校の本部はケンジントン公園の隣りで、アルバートホールの並びです。その他その近辺にキャンパスが散在していて、ヴィクトリア&アルバート美術館に隣接して絵画、版画、印刷の教室があり、同美術館内部にもCultural History科の研究室の一部がありました。

私はそのCultural History科に籍を置かせていただいて、Gillia Naylor先生のご指導をうけました。ネイラー先生はモリス関係の著書が多い人です。主任教授はChristopher Frailing先生で、この方は映画を研究して居られました。ネイラー先生は私が行く直前までブライトンの学校に居られて、私はその著書<The Arts and Crafts Movement>を読んでいたので、そちらにも手紙を出していたのですが、私にとって幸運なことに先生がRCAに移って居られたので、そちらからお招きのお手紙をいただきました。Cultural History科は小規模な科で、スタッフが10人ほど、学生が20人ほどという感じでした。個人教授が多く、それぞれが予約をして先生の研究室で指導をうけましたので、私には実数が掴めませんでした。

宿泊は短期のこともありましたので、空港の案内所で教わったEarl's Court駅の近くの安ホテルと交渉して、長逗留だからということで更に安くしてもらってそこに落ち着きました。駅近くのBarkston Gardenという小公園に面したホテルです。着いた夜はかなりの積雪があり、それをオレンジ色の街灯が照らしていたのを覚えています。食事は近くのSainsburyという巨大なスーパーで買ったパンやハムや果物類をホテルに持ち帰り、部屋でコーヒーを沸かして食べて居

りました。ですから学校のキャンティーンが頼りでした。たまたま中華街へ行って食べる料理が美味しかったのを思い出します。

学校へは地下鉄で二区行ったSouth Kensingtonが最寄りの駅ですが、そこから左へ直角に曲がって歩いて行く公園近くの学校まではかなりの距離があるので、直接に住宅街を斜めに横切って歩いて行きました。15分か20分ぐらいだったと思います。慣れてくると近くのHolland Park付近には住宅建築として立派な家が多いことが分かりました。たとえば建築家Riccardの自邸はDe Morganのトルコブルーのタイルに覆われ、内部はビザンチン様式のドームになっていて立派なものでした。またその近くには画家L. F. Leightonの家があり、これはOrientalismの影響のある広大なアトリエでした。夜にはそこで時々音楽会があり、二度行きましたが、30人程の聴衆と途中で紅茶を飲みながら寛いだ雰囲気を楽しむことができました。

学校での研究は前述のように個人教授で、私の場合はテーマが決まっていますので、専ら先生に見学先を紹介してもらい、予約も先生に電話をしてもらって各方面を歩き回りました。それを報告し、助言を受けて、また次の所へ行くという事の繰り返しでした。印象が強かったのはBexley HeathのRed Houseを訪ねることができたことです。また当然な事ながらWalthamstowのMorris Galleryには何度も足を運んで多くの事を学ぶことができました。

またネイラー先生御自身が私を案内して下さった事も二度ありました。最初はオックスフォードで、他の学生数人と共に学校のマイクロバスで行きましたが、訪ねた所はモリスの母校であるExeter CollegeやGothic Revivalの代表的建築であるKeble Collegeなどで、この遠足は私のために催して下さったと思っています。その次に行ったのはブライトンのRoyal Pavilionで、先生と二人で行きましたが、この時はこの建物の建築史上の意義を理解していなかった為に一枚も写真を撮らなかつた事を今では後悔しています。

出発前に私は東京のRuskin協会の招待状を貰って行きましたので、英国ではWight島のBenbridge SchoolのRuskin GalleryやSheffieldの同様のコレクションを見学することができました。その時に撮影を許可していただいたヴェネツィア滞在中のラスキン自筆のメモの写真は貴重なものだと思います。

この様にしてロンドン滞在は夢の様に過ぎて行きましたが、この間に撮った大量のスライド写真は撮影したその日の帰途に学校の写真科に持ってゆくと、その助手の先生が確実に翌日迄に現像してくれるので大変助かりました。帰国してからの現像では失敗しても取り返しがつきませんが、この方法なら撮り直しができるからです。

一月から四月まで居たのですが、宿の前の小公園はいつまでも黒々とした枯れ枝のままで、帰る間際になってやっと若芽を出し始めました。帰国前夜の学校からの帰途、白い家の多い住宅街の桜に似た花が満開で、それが路上にも、停まっている自動車の上にも花びらを散らして、夢幻的な光景を見ました。また来たいと思ったものです。

いつでも行けると思っていました。その後は二度しか行っていません。RCAから数年たって、今度はArt Decoの研究でパリにゆきました。そのアール・デコのデザイナーの一人であるEileen Grayは出身がアイルランドで、パリへ来る前にロンドンで学んだ人です。したがってその資料はパリよりもロンドンの公文書館に多く在ることが判り、再びネイラー先生のお世話になることになりました。パリから手紙を出したところ覚えているというご返事があり、またRCAへ行って先生に公文書館との交渉をお願いしました。

ロンドンでの研修の後は私の大学での講義は「デザイン史」

が中心になり、母校の東京芸大でもデザイン史を担当させてもらっていますが、周知のようにArt NouveauもBauhausもArts and Crafts Movementを一つの出発点としている事が確認できて、月並みかもしれないけれどもこれをテーマにした事が間違いではなかったと思っています。授業で繰り返し使っているスライドはその時のオリジナルで、傷が付かないうちにコピーを作ろうと思って居るうちに10年経ってしまいました。

(MORISHIMA Isamu, 東京家政学院大学住居学科教授, Royal College of Arts, 1986)

登山と高所環境の国際医学会

上田五雨

1998年5月21日から24日にかけて、第3回世界登山医学会と、第18回日本登山医学シンポジウムが、松本のホテル会場で合同開催された。発表と質疑応答は、英語は日本語に、日本語は英語に同時通訳された。私は日本語の際には英語を、英語の際には日本語をイアホーンの音の強弱を調整し乍らきいてみた。スライドから、視覚的にも理解できるので、内容は分かり易いと言える。演題、講演は、前者230題、後者80題足らずで、全てをきくことは不可能であり、自分の好みに従って、予めしらべたプログラムから、適当に選択して、きくことになる。

全世界の同業者が三年に一度集まるので、会の運営、機関誌の発行、内規の改定等につき、幹事会も行われた。私は期間中に二回、その会に参加したが、ここでは通訳はないので、要点の把握は極めて大切であった。私は10年近く、機関誌の編集にも関与していて、日本からの記事を作製していた。現在は英語を母国語とするロンドンのポラード氏が、中心となり編集を行っているが、始めは、スイス、デンマーク等の医師が携っていた。

たとえば、日本人が日本語で物を書いても、決して十分に正しい文章になるとは言えない。まして、英語母国語以外の人が英語で物を書くことは、かなり困難である。同じ事を表現しても、その理解は各国の人々により、異なることは起ると考えなければならない。次に、学会で起ったそのような実例について、専門領域とは関係しない事をとりあげて、述べてみる。

学会は、有名な博識のアメリカの先生達の討論が目立つ。その一例。二人の学者がA先生に、と質問し、答も流暢に弁じられた。私は第一質問者に対する答の大体の点は分った。しかし、第二質問者との質疑応答は、よく分らなかった。そこで、休み時間に、A先生に、第二の質疑応答の要点を、教えて貰いたいと申し出てみた。所が、意外なことには、その場で答につまられ、今は思い出せないで、後から思い出したら返事すると、答えられた。しかし、返事はなかったで、それ以上きくのもうさがるかと思ひ、それについては尋ねるのを止めた。あれ程見事に論議しているなら忘れる筈はないと考え、私は大変びっくりした。主張点が印象に残らぬ事でも、母国語同志ならしゃべれるのかと知って、大変興味深くも感じられた。

また、ポスター発表では大聴衆の面前ではなく、一対一で質問できるので、易しい事でもじっくりと聴けるという利点がある。下手な英語でも平然としゃべれるのがよい。私は、ポスター掲示中のB先生に、その記号はどういう意味だというような易しい質問をいくつか、してみた。するとBは、図表の中に、説明をつけ加えたりして、その後には雑談に迄発展した。お前の病院を見せてくれないかとの質問も出てきた。そこで、学会終了後、別会場である市民公開講座の時間の途

中、午後3時頃、あなたを連れて行くから会場で私を探してくれと、答えておいた。その翌日、彼は、何か分らぬ事があれば、誰にきけばよいのかと言ったことを私にきいた。私は何が分らぬのかよく分らなかったが、会場のホテルのフロント係にきいてみよと答えておいた。お互に、学会場では忙しく、長話はできないので、その日は別れた。学会終了後、公開講座は学会員も参加自由の会場で、私は講演をききつつ、2時半頃から彼を探しはじめたが見つからない。会場で呼び出し掲示を出して貰いたいと申し出たが、講演の妨げになるので、出来ないと言われ、私も一寸あわてた。刻々と時間は迫るので、私は、彼がまだ元の学会場ホテルに居るのかも知れぬと考え、既に公開講演会場に出かけたかどうか尋ねるために、電話した。すると、彼は電話口に出たので、待つ場所を間違えていたのが分り、あと10分位で、そこへ行くから待っていてくれと伝え、車で学会場のホテルへ行き、彼を拾って、私の病院まで出かけることが出来た。私にとって分りきった、三時に会場という表現は彼には通じなかった。会場は2ヶ所にあるという事をだめおししなければ、外国人との交渉はうまく行かぬというのを、今更のように知らされた。後で考えてみると、彼の側からは、分らぬ事とは、私が見つからなくて困った場合はどうするかと、きいたのだと、今は推測される。外国人同志、何か約束する時、このような理解のくい違いが起り得ることを、改めて反省した。

学会では、人前で質問するだけではなく、個人的に色々ときくことによって、大変ためになることも多い。あるアメリカの眼科医の発表は、大変面白く、高山で起る目の変化は、網膜の出血がよく知られているが、角膜の変形などもあり、その測定はさほど困難ではないとの情報も得られた。また、質問者と応答者の討論が紛糾した場合に、大変よいコメントを与える第三者が居る例もあった。そのコメント者の評価を、後に個人的につたえている中に、話しが進み、関連資料をいただいて、大変参考になるという場合もあった。

学会は、会場だけが勉強の場ではなく、会場の外でも大変よい表現がきけたり、議論ができたりする。休憩時間は決して、ハウアーユーだけの世界であってはならない。ふだん持っていた疑問に、新しい解決が得られることもある。世界の頭脳が集う所、このような一期一会は、多くの会員の間で、並行して行われていたものと思う。

学会の終了後に、少し余裕ができると、一寸きいた話を、再びじっくりと考え、一層興味がわいたり、関心が深まったりすることもある。今まで考えても見なかった視点からの考え方に、視野が広まることもある。更に、深く知りたければ、自分で勉強すればよい。英語でTwo heads are better than one. と言ひ、日本語で三人よれば文殊の智慧と言ひ、学会は、研究成果を吟味、進展させる上では大変役立つものである。

只、その準備、運営等には裏方さんの努力とか、事務局の苦勞も並大抵のことではないので、学会の規模が大きくなるほど、資金面、時間面での工夫と、内外からの経済的、精神的な支援とが必要になる。長野は今年、冬季オリンピック、パラリンピックに続いて、登山医学会も成功させ、多くの人々の協力で、今年前半は燃える年となった。天候にも恵まれ、無事に終了した後、私は松本から約30Km東南に離れた上諏訪の医院に、外国から有能な研究者3名、日本から3名を案内し、医療活動の実践を見学して貰ひ、関連するリハビリ施設、有料老人ホーム、公営老人施設なども見て貰ひ、学会行事以外の視察で、討論もして貰えた。

あらためて、英語の会話の重要さと、その恩恵を十二分に味わうことが出来た。

(UEDA Gou, 諏訪湖スパクリニック, ダラム大学医学部, 1960)

はがき通信

母校ケンブリッジ大学のこと 河合祥一郎

1989年10月からBritish Councilの奨学金を頂いて一年間のケンブリッジ大学ルネサンス文学修士コースに留学したのが、ケンブリッジとの長いつきあいの始まりであった。修士号を取得した後、博士課程に進んで1994年まで滞在を続けて帰国、1997/98年の一年間またBritish Councilにご援助頂いて再びケンブリッジ大学の学生生活を送らせて頂いている。都合6年近くの学生生活を送ることとなり、東京大学大学院での在籍年数よりもはるかに長くなってしまった。ケンブリッジ大学は私にとってすっかり母校となり、ケンブリッジの町も日本のどの町よりも馴染み深い処となった。英文学というまさに本場ならではのジャンルで、しかも他ならぬケンブリッジ大学から最高学位を得ようというのは並大抵のことではない。その快挙を成し遂げたのは、日本人では英文学では東京大学名誉教授の山内久明先生、そして米文学で帝京大学の阿部公彦氏あるのみと理解している。私も微力ながらその例に倣おうと、かつては3日に1本のペースで浴びるように観ていた芝居も今回は1本たりとも自らに禁じて、今回の滞在では文字通り部屋にこもっている。これまでBritish Councilから受けた恩義に報いるためにも祈願を達成したいと思う。(KAWAI Shoichiro, 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部助教授, Trinity Hall, Cambridge, 1989/94, 97/98)

ケム川の流れば絶えずして...(第5回)

池島大策

実は、英語のアクセントや訛りから、話し手の出身国、出身地方、職業、その他のバックグラウンドが識別しうる、ということは、学校の授業では習わないことではないだろうか。本稿での「英語」とは、英国の英語、すなわちブリティッシュ・イングリッシュ、クイーンズ・イングリッシュ又は単に「イングリッシュ」であって、アメリカン・イングリッシュ又は「アメリカン」ではない。この区別は、英国人にとって非常に重要だそうでイングリッシュとは「英国の英語」であって「米国人の話す英語はアメリカンである」と皮肉混じりに言う友人も少なくない。この点ではアメリカ人から見ても英語と米語とは全く別の言語ともいいうるようである。

既に亡きウィリアムズ(G. Williams)教授夫妻は、「巻き舌の、発音が極めて特徴的な」米語と評していた。私などは、せいぜいブリティッシュ・アクセントを真似ようと心がけてきたので、英国滞在中に米国に学会出張した際、ニューヨークの空港の旅券審査官が私の受け答えから「あなたがイギリスから来たことは、アクセントから分かります。」と言ってくれた時には、正直言って嬉しかった。滞在先のケンブリッジでは、その国際色豊かな研究環境を反映して、前から個人的につきあいのある英国人や旧友たちをのぞけば、研究所の研究員、教授や学生(大学院生)の大半が、いわば非英国人であった。大学の学部生は英国人のためのもので、大学院は大半が米国、カナダ、オーストラリアや英連邦諸国の留学生で占められているという印象であった。確かに、教員スタッフやカレッジのフェローのたちも英国人以外に、米、加、豪などのいわば英語圏の出身者をはじめ、様々な国籍の所有者たちによって代表されていたように思われる。ここでいう「英国人」というのも、厳密には、イングランド人、スコットランド人、ウェールズ人及び北アイルランド人の四つに少なくとも分類され、それぞれ固有の文化と歴史を持っていることは言うまでもない。

すでに何度か紹介したように、いわば純粋の英国人(この言葉自体に無理があるかもしれないが)は、かなり限られていた。たとえば、研究所では、主たるスタッフではロー

(Lowe)先生、(Corpus Christi College)(但し、ウェールズ出身?)、グリーンウッド(Greenwood)先生(Magdalene College)、研究員のニック(Nick)但し、スコットランド出身)、秘書のグレン(Glen)、クリスティーヌ(Christine)、ストロング(Stronge)夫人(ご主人はアイリッシュ)、「国際法レポート」編集補助のカレン(Karen)(マンチェスター出身、Girton College)ぐらいであった。

そもそもエリ・ラウターパクト(Eli Lauterpacht)所長(当時)自身は英国籍であっても、かの有名なその父上のサー・ハーシュ(Sir Hersch)は、その名の示すとおり東欧からのユダヤ系の移民であった。また、同大学国際法講座教授のクロフォード(Crawford)先生は、オーストラリア出身で、オックスフォードで博士号を得た。また、例えば主任研究員のマーク(Marc)はドイツ人であるし、ロバート(Robert)はカナダ人である。友人のファディ(Fadi)はレバノン出身、博士課程のマイケル(Michael)はカナダ人であり、博士課程や修士課程の友人たちはみな英国以外の国籍の持ち主ばかりで、英国籍の人にはお目にかからずじまいであった。

こういう構成であったから、これらの話す英語もバラエティに富んでおり慣れてくるとその話す英語のアクセント、訛りなど、微妙な違い(又は、実は非常に大きな違いなのだが)を識別できるようになるから不思議である。そして、次第に、英語を話す人物の国籍だけでなく、様々なバックグラウンドにまで色々と憶測を巡らすようにまでなるのである。例えば、ケンブリッジ大学やオックスフォード大学の出身者にはオックス・ブリッジ独特のアクセントがあるそうで、彼らは社会にでてからもそれを言葉のはしばしに滲ませつつ活躍するそうである。そして、それは誰が聞いても認識可能なのだそうだ。但し、ケンブリッジという街そのものにもローカルなアクセントはあり、大学内のそれとは全く異なり、イースト・アングリアの人たちに多いものだそうである。例えば、水のwaterは、「ター」の部分が発音されず(又は聞こえず)、「ウォーア」に近い発音となるし、betterは「ベア」に近くなる。ストロング夫人は、まさにイースト・アングリアの典型らしく、ABCのA「エイ」の発音が「アイ」と聞こえ、私を示すI「アイ」との違いがなかなか分かりにくい。その意味ではオーストラリア人がよくtodayを「トウダイ」と発音するように、「エイ」が「アイ」に近くなる傾向がこの地方にも強いらしい。こうした訛りは、毎朝好例の彼女とのウォームアップ会話で学ぶことができた。所長の英語は、既に前にロバートがほれほれすると賞賛していたことを記したように、確かに「上品な」又は「知的な」雰囲気満ちているのがよく分かったし、人前で話すことに慣れているせいか、話が上手いのである。特にユーモアを交えることを欠かさない配慮というものは、好例の金曜ランチ・セミナーの司会や講演の時に、伺えた。また、法律家という職業特有のアクセントというもあるらしく、ロンドンの法曹団体が集中する限界で見かける人たちの英語や、弁護士(パリスターであれ、ソリスターであれ)たちの話す英語も明らかに違うようなのである。これは、英国の法曹家たちが法廷でかぶる「鬘」と同じくらいに権威や威厳のあるものらしく、テレビのインタビューなどに答えるこれらの法曹家の英語は極めて独特であることがわかる。

こうしたアクセントは、話し手の話術とも相まって、その人の「人物像」をも浮き彫りにしてしまうといえそうである。例えば、グリーンウッドの話す英語は非常に快活明朗な伝統的クイーンズ・イングリッシュで、授業でも多くの学生を魅了してやまないその声量と話術は、その押し出しの良い風貌とも相まって、他に抗する者がいないと言われているそうである。彼は鏡の前で毎日講演の練習をしているそうだ、との噂もあった。他方クロフォードの話す英語にはオーストラリア

誰りがあり、口の中で少々くぐもった感じのあるものではあったが、彼は講演や講義などで自分の意見を言う際に常にポイントを3つくらいに纏めて、「要点は三つある、第一に...、第二に...、そして第三に...である。」と非常に簡潔かつクリアーに裁断してしまうので、頭脳明晰なことが話し方から醸し出されていた。ドイツ人であるマークは、イギリス人以上の、非常に強いブリティッシュ・アクセントを効かせ、常にジョークを混ぜた英国風の言い回しを好んでいた。講義等で彼の話す英語は、ドイツ語の影響か、関係詞を繋ぎまくる長い複雑なものが多かったものの、彼もやはり話術には非常に長けていた。

カナダ人のロバートに言わせれば、自分のアクセントは自分の所属国のアイデンティティの一つであるから、英国にいるからといって英国風に直すつもりもないと言って、aboutやhouseなど'ou'の発音が「アウ」ではなくて「オウ」となることにも気にしていなかった。ニックはスコットランド出身であるから本来ならスコティッシュ独特のアクセント(例えば俳優ショーン・コネリーのような)があるはずなのだが、ロバートに言わせれば、ニックはその家系の良さや受けた教育の高さを反映して、そのアクセントを「隠す」ことができ、極めてインテリな英語を話すのだそうである。確かに、多芸で物知りかつ趣味人のニックからは、色々な機会を通じて英国の伝統や文化の粋をほんのちょっぴりではあるが味わわせてもらった。

以上のような色々な「英語」の環境の中では、教科書や授業では決して習わない日常表現、会話のテンポ、その他もろもろのボディ・ランゲージは、非常に新鮮かつ驚愕でもあり、自分の英語の拙さを嘆くことも少なくなかった。従って、よく「英語が上手くなる近道は、ガールフレンドやボーイフレンドをつくることである。」と言われる。しかし、これは、こと若い人たちに関しては全くの嘘ではないか、とも感じられた。というのは、そもそも英語の話せない者(特に男性)が、相手との会話による意志疎通により人間関係を築き上げる欧米文化で、女性と親しくなれる機会があるはずもないであろう。若者の集うパーティでも、女性同士は親しく話し合うし、また欧米の男性は女性に対しては積極的に話しかける傾向にあるようである。従って、日本人女性は日本人男性に比べて英語の上達も早いようで、英語の話せない日本人男性(特に寡黙な又はシャイな)というのは、まさに悲劇的であろう。

もっとも、世代、国籍、言語、話す言葉のアクセント、その他バックグラウンドの違いを超えたつきあいというものは常にあって、英語の出来・不出来にかかわらず、人間相互のつきあいの重要性を感じさせてくれる。このことを教えてくれたのも、ケンブリッジ留学であった。そして、筆者の在住するスイスにいても、人間同士の交流ともいべき「ケム川の流れ」の絶えることのないことが日々如実に感じられるのである。

(IKESHIMA Taisaku, ケンブリッジ大学, 1994 / 95)

ブリティッシュ・カウンシル名古屋センター - 開設

ブリティッシュ・カウンシル・名古屋センターが去る9月11日に開設されました。事務所が同センター内に移転し、ブリティッシュ・カウンシル イングリッシュスクール名古屋栄校も同時に開校されました。これは、東京、京都、大阪、福岡に次ぐ、ブリティッシュ・カウンシルの5番目の英語学校となります。アドレスは下記の通りです。

ブリティッシュ・カウンシル・名古屋センター
〒461-0005 名古屋市東区東桜1-13-3

記念出版プロジェクトについて

英国祭UK98の開催に合わせて企画しました出版プロジェクトが無事終わりましたことは、BCJA会長としてこの上ない喜びです。出版の趣旨にご理解とご協力戴きました会員の皆様に心よりお礼申し上げます。このプロジェクトは名誉会長のマイケル・バレット氏から、BCJAとして英国祭UK98に参加できるものはないだろうかとの問いかけで始まりました。委員会で数回議論した末、瀬川彰久先生(北里大学)のご提案で、英国留学の貴重な経験をもとに次世代へ送るメッセージとなるエッセイをまとめて出版することになり、皆様に呼びかけた次第です。

振り返って見ますと、昨年のAGMでご承認戴きましたが、ご多忙の皆様方からどのくらいご支援を得られるか心配でした。特に英国祭UK98のイベントの一つとして参加するためには限られた期間しかありませんでしたので、心の片隅では大変な賭けかもしれないと思っておりました。しかし、それは私の取り越し苦労に過ぎませんでした。昨年10月と年頭の呼びかけで多数の方々が執筆と協力をお申し出下さったことは嬉しい驚きでした。計画では50名程の執筆者を想定しておりましたが、最終的には60名を越えるご寄稿がありましたので、予定ページ数を遙かに上回り、ブリティッシュ・カウンシルからの情報掲載を断念せざるを得ませんでした。出版費用についても、執筆者の方々が寄付を承知で快く原稿をお書き下さり、執筆しない方でも"BCJAへの寄付なら"と一筆添えてご送金くださった方もおられるほどでした。また、お手紙、お葉書、ファックスで激励くださった方々もございました。このようにブリティッシュ・カウンシルから受けた恩恵を何かの形でお返ししたいという皆様のお気持ちが、今回の出版プロジェクトを成功に導いた原動力であることは疑いの余地はありません。

地方にいる私は実務が何もできないものですから、すべてを編集委員長の瀬川先生にお願いし、事務的なことは吉田和子様(ブリティッシュ・カウンシル)にご協力を仰ぎました。出版に至る過程で安東伸介先生(慶應義塾大学名誉教授)、河合秀和先生(学習院大学)には、何度となくアドバイスを戴いたと承っておりますし、木村 孟先生(東京工業大学)はケンブリッジと日本を往復しながら原稿をお書き下さったとお聞きしております。また、委員会メンバーにも会合の度に貴重なご意見を戴きました。出版をお引き受け下さった風人社の大森誠氏からの読者に読み易くするためのご提案、出版の趣旨をご理解下さった大和日英基金の助成も忘れることができませぬ。最後に、出版のきっかけとなるご助言を初め、巻頭言、ご寄付、出版本を国内外のBCオフィスや日英協会へ配布して下さるなど、終始ご支援を賜りましたマイケル・バレット氏には特別の謝意を表したいと思っております。この出版が時代を超えて読者と英国との架け橋になり、両国の相互理解の一助になれば幸いです。

(中村高遠 BCJA会長 静岡大学工学部)

記念出版ご報告ならびに決算

皆様のご協力を頂き、記念出版は英国祭UK98公式イベントとして認められ「BCJAの本 留学体験者が語る英国の学問と生活」と題して、5月15日に無事出版されました。会員の皆様からは、最終的に200万円近くのご寄付をいただき、日英大和基金からの助成金とあわせ、出版のための目標額200万円を達成いたしました。諸費用を除いた残額3万8810円は、コミッティー会議の承認を経てBCJA Newsletterに寄付いたしました。出版の一部はBCJAで一時的預かりし、有志からの寄贈分をあわせ120冊をブリティッシュ・カウンシルに寄付し、また一部は日英協会、日英大和基金ジャパンハウスに寄付いたしました。寄付した本は、東京・京都・大阪・福岡の4ヶ所のブリティッシュ・カウンシルで販売され、当初の目標でありました「英国留学をめざす若い人、英国をもっと知りたい人」のために役立たせていただいていると聞いております。会員の皆様からは、無償のご執筆、ご寄付、激励のお便りをはじめ、本書出版後も「ひとり2冊」運動のご協力等、あたたかいご支援をいただいております。ひとりひとりのお名前を挙げて謝意を表すべきところ、匿名をご希望の方もあり、省略する失礼お許しください。本書は、約850名におよぶBCJA会員の善意が結晶した本となりました。皆様のご支援に心より感謝申し上げます、以下決算報告いたします。

1) 出版本タイトル

「BCJAの本 留学体験者が語る英国の学問と生活」
執筆者総数のべ61名(288ページ)
5月15日初版発行
(発行部数3000部。定価1800円 + 税)

2) 決算

収入	寄付金(総数94名)	1980,000円
	大和日英基金助成金	113,387円
	利息	223円
	計	2093,610円
支出		
	出版本買い取り	2000,000円
	通信費	50,200円
	振込手数料	2,100円
	為替手数料	2,500円
	計	2054,800円

残総計 38,810円
(BCJA Newsletterに寄付)

3) 本の収支

買い取り金額	(1890円 × 0.8 = 1520円)
買い取り総数	200万円 ÷ 1520円 = 1323冊
寄付者へ分配(1万円あたり6冊)	1188冊
梱包手数料相当分	62冊
計	1250冊

残	1323-1250 = 73冊
執筆者有志(5名)より寄付	69冊
総計	142冊

ブリティッシュ・カウンシルへ	120冊
大和日英基金ジャパンハウス(ロンドン)へ	5冊
日英協会へ	17冊

以上

(瀬川彰久、記念出版編集委員長、北里大学医学部)

編集後記

このニューズレターも発刊以来5年を経過し、第10号を発刊できることとなりました。今回は記念出版の余波も手伝ってか、多数の原稿をお寄せいただき感謝しております。私の生まれる以前に留学された方から、英国滞在中の方まで幅広い年齢層の、しかも学問的専門分野も様々な方々からの原稿を目にしていると、いかに自分の過ごしている世界が狭いかということを痛感させられます。しかしまた、このような多様性のすべては人間の「脳」が創り出したものであり、その脳の研究のごくごく片隅をかじりながら生活の糧をえることができていることを幸せに感じております。

この秋には中国、パキスタンへの講演旅行を控えており、さらに未知なる世界、脳が創り出す多様性の世界を体験できることを楽しみにしています。

今回も原稿の入力の多くを会員の奥様である田中南欧子様にお手伝いいただきました。このニューズレターはこのように完全なボランティアで成り立っております。これからも会員の方々の暖かいご支援をお願いする次第です。

年数回の委員会の場でこのニューズレターに関して多くの貴重な御意見をいただいておりますが、毎回次号からはと思いつつ、残念ながらその半分も達成できていないのが実状です。これもただ本業の多忙さにかまけて、手つかずにいるというのが本音です。今のところは暖かく見守っていただければ幸いです。

(東京女子医科大学 脳神経外科 平 孝臣)